

巻頭言

情報メディア学科の教育と研究

奥平 雅士



本学部は1997年開設以来、急速に進展する情報化社会にふさわしい最先端ITを駆使した教育・研究の場と位置づけ、IT環境の継続的整備を進めてきました。2002年4月に開設された情報メディア学科では、情報に関わる社会科学系および工学系両方の教員の参加を得て、このようなIT環境のもとで学生が情報メディアに理解をもち、新しい情報化社会をデザインする能力を磨き、異文化を含む現代社会の多様なメディア・コミュニケーションのあり方を学んで社会に対応する力と情報発信する能力を育成することに力を注いできました。

本学部におけるITと教育のあり方については、山田豊通前学科主任が本学部紀要10周年記念号で述べられていますが、大きく以下の3つに分けられます。すなわち、1)対象としてのIT、2)道具としてのIT、3)支援ツールとしてのIT、であり、本学科では開設以来、この3つの視点でITを教育に取り入れてきました。

対象としてのITは、教育分野ではITを使って何が出来るかを知り、自ら使いこなして学習、研究に活用できることにあります。本学部では、情報リテラシー演習、情報編集入門、LAN環境演習など本学部の情報環境を生かして他の文系学部に見られない高度なIT教育を施してきました。道具としてのITには、パソコンとプロジェクターによるデジタルプレゼンテーションや遠隔講義などIT抜きでは困難な教育活動があげられますが、本学部では文部科学省のサイバーキャンパス整備事業の補助を得て充実させたIT環境のもと、授業における教員の利用はもとより、入学時から事例研究・卒業研究発表まで4年間を通じて学生のプレゼンテーション能力向上にも力を注いできました。また、武漢大学や会津大学等との遠隔授業、学内の教室間連携授業等も積極的に行って来ました。支援ツールの観点からは一昨年からLMS(授業支援システム)を導入し、さまざまな問題を解決しつつ出席・レポート・教材配布・試験評価などに用いる試みを実施しました。さらに、学内ポータルを通じて、教務・総務・学生情報などが手軽に利用できるような環境整備と利用支援を着実に進めてきました。

近年 Information and Communication Technology (ICT) は社会に広範に浸透してきています。このような現代の状況と本学部教育におけるIT活用の経験・成果を踏まえ、今後、いっそう重要度を増していくと考えられる、情報システムをベースとしたコミュニティ形成、コミュニケーション環境のあり方をさぐり、その研究・教育を通じて社会的・実践的人材育成を目指す試みを本学科より提案し、2007年度の文部科学省現代GPに採択されました。情報システムの基本をおさえた上で社会活動にIT (ICT) を活用する研究・教育は本学科の特色に沿ったところであり、また、地域社会におけるコミュニティ形成は本学部が従来から重視してきたところです。この研究は学部全体として学科の枠を越えて連携しながら進められています。

Webシステムのみならず全てのコミュニケーションはなんらかの表現を含み、ICTが浸透するにつれ、いかに情報を表現し、発信し、理解するか、が極めて重要になります。とくにブロードバンドネットワークを前提としたこれからの社会ではUXD(User eXperience Design)と呼ばれるユーザに受け入れられるシステム・Webデザインや動画による表現能力が、一層重要になると考えられます。私は、学科開設以来、情報リテラシー演習の授業も担当していますが、学生のパソコン操作の知識レベルは格段に向上していることを実感しています。また、本学部入学生の情報表現への関心と能力も高まっているように思います。本学科は開設以来、よりよきコミュニケーションのための情報デザインやメディア製作の教育・研究を当初から企画し、カリキュラムを設計してきました。手厚い情報システム系教育は本学科の特色の一つですが、今後、学生の情報表現への意欲と関心に応え、また、社会の進展に応じてコミュニケーションの視点からこれらの分野の教育・研究の取り組みを一層充実させることが重要と考えています。

一昔前、活字信仰と呼ばれたものが今、インターネット信仰・メディア信仰となり、与えられた情報をそのまま受け入れる傾向の高まりが見受けられます。健全な情報化社会は、情報発信・流通の特性をわきまえ、情報を吟味して正しく理解し節度を持って行動できる自立した個人の存在が大前提です。今後、メディア政策やメディアリテラシーに関わる教育と合わせ、情報の表現・発信・理解のための教育・研究の一層の充実をはかっていきたいと考えています。

OKUDAIRA Masashi

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科主任教授